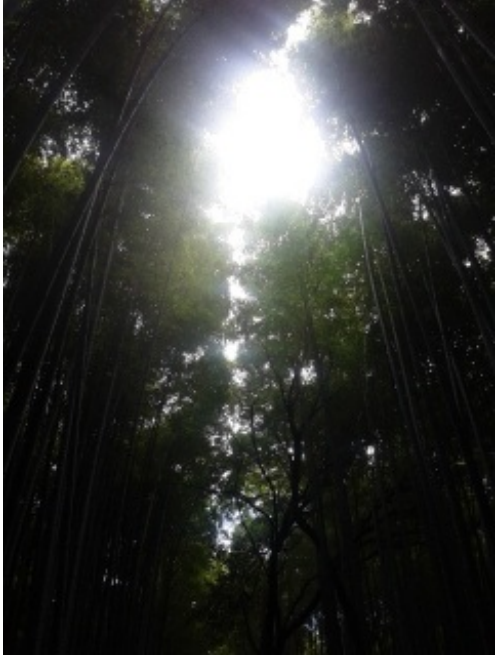

六　挑戦

　俊彦さん庭にいるのだろうか。彼にメッセージは届いただろうか。本当は、翌日も行きたかったけれど、そう度々、病院の近くを訪れれば、ママにだって怪しまれるし、街の監視カメラや宇宙からの写真にも写ってしまう。１週間に１回が限度だ。それでも、多いくらいだが、それぐらい行かないと、彼との交流が途絶えてしまう。彼のことが知りたい。なぜ、男性が生きているのか、彼は何をしているのか、なぜ、病院から抜け出せないのか、なぜ、なぜ、と疑問が噴水のように湧き上がり、水面に落ちた疑問が再び上昇する。

「ママ。また、あのスパゲティが食べたくなったの。だって、デザートのケーキは毎週違うのよ」

　そうお願いして、ママにお出かけを認めてもらった。ママはあたしの本当の目的は知らないだろう。だけど、病院の周辺に行きたいということはわかっているだろう。後は、ママにいくら理解してもらうかだ。

　来た。病院の壁が見えた。向かいのビルの鏡を見る。スマホの時間を見た。ほぼ、同じ時刻だ。見えた。彼の姿だ。彼が上を向いた、ガラス窓を見ている。あたしもガラス窓を見る。窓ガラスを介在して、お互いの存在がようやく確認できた。

　これでここを訪れたのは何回目になるだろうか。もう、１年は過ぎた。あたしがわかったことは、彼の名前が俊彦さんで、この病院には、彼のように生活している、飼われている男性が、各世代に数十人程度いるとのことだ。

　彼らには、あたしたちと同じように、小学校、中学校、高校、大学と進学するらしい。その中で、自分が好きな学問を学んだり、適応した職業に就いて、一日を過ごすらしい。だが。それは強制ではなく、あくまでも自主的なものらしい。いわゆる、暇をつぶす、時間を経過するために、こうしたことを行っているのだ。だけど、そうした生活も永遠には続かない。一定の年齢、それは、四十歳らしいが、ある日、突然、病院からいなくなるらしい。

　俊彦さんが考えるのには、いなくなるとは、抹殺されたのではないかとのことだ。だが、本当のことはわからない。何しろ、消えた男性は、二度と、この病院には戻ってこないからだ。当然、彼らと一緒に、彼らを育ててきた、パパドローンも一緒に消え去るとのことだ。まさしく、お役ごめんということだ。

　そして、彼ら男性が存在している真の目的は、研究で新たな発見をすることでも、仕事で成果

を出すことでもなく、遺伝子の提供、具体的には精子の提供だそうだ。俊彦も定期的に、病院で精子を放出させられているらしい。その提供された精子は、あたしたち女性の卵子と人工受精し、子どもを生産させているのだそうだ。

その際には、高度に発達した生命科学の力で、男性と女性の発生割合を１：１０００で維持させている。また、人工授精を通じて、人口も一定の人数の確保ができるらしい。こうした取り組みを行うことで、人間社会で問題となった、急激な人口増大を抑制できるとともに、晩婚化等による少子化による人口減少も解決することができたとのことだ。

そう言えば、あたしのところにも、先日、ついにメールが届いた。あたしたち女性は、成人になると、政府に対して卵子を提供することが法律で定められている。また、そのメールは、全て、赤い文字で書かれているから、赤メールと呼ばれている。赤メールが届くことで、女性は成人として認められるのだ。このメールが届くと、女性は病院に行き、健康診断を受け、子どもを産めるかどうかを確認した後、順番に、出産することになる。つまり、出産は、七五三や成人式と同じように、女性にとっての通過儀礼でしか過ぎないのだ。

その出産方法だが、政府が説明するには、人工的に製造した精子と女性が提供した卵子とを受精させ、その受精した卵子を提供した女性の子宮に注入し、次の世代の赤ちゃんが産まれることとなる。つまり、あたしも検査の結果、健康であることが証明されれば赤ちゃんを産むことになる。だけど、俊彦さんの話だと、精子は人工的に生み出されているのではなく、あの病院で飼われている男性の精子とのことだ。

人工的に製造された精子は嫌だけど、顔もわからず、性格も知らず、どんな素質やどんな才能を持っているかもわからない男性の赤ちゃんを産むなんて、あたしは嫌だ。多分、政府は、女性がそういう特定できない男性の子どもを産むことを生理的に嫌がることを知っているからこそ、人工的に精子を製造していると偽っているのだろう。

以上が、１年を通じて、週に１回程度、俊彦さんと情報交換で知りえた事実だ。でも、本音を言えば、なんとしても、彼に、俊彦さんに、直接、会って、話がしたい。どうせ赤ちゃんを産まないといけないのであれば、顔を知り、性格も知っている俊彦さんとの赤ちゃんを産みたい。彼ともっと深く知り合えないのか。

女性とこうして会話ができるとは思わなかった。女性も男性と同じように、この病院で生まれて、ママドローンの世話の下、成長していくのだそうだ。同じように、学校で勉強し、卒業したら、それぞれ社会の一員として、仕事をしていく。全く、自分たち男性と変わりはしない。あ

えて言えば、女性たちは、この病院の外で、自由に生きているのに比べ、自分たち男性は、狭い病院の敷地の中でしか過ごせない。

外はどうなっているのか。残念ながら、外部世界のことになると、ある程度まではインターネットで調べることはできるけれど、肝心な部分は遮断されて、情報を把握することはできない。いたずらに外部世界を知ることで、この病院から脱走したいという気持ちをおこさせないようにするためなのか。

自分たち男性に知らされていることは、これまでの人類の歴史の中で、いかに男性が暴虐極まりない行動を取ったかである。第１次から第５次戦争で、すっかり世界は破壊されるとともに、戦争の行われていない時期においても、殺人や暴行など、犯罪の主役となったのは主に男性だそうだ。もちろん、女性だって、近所の夏祭りのイベントの際、カレーに農薬を混入して振舞ったり、遺産相続を狙って、飲み物に覚せい剤を溶かし込んで飲ませたり、家族に睡眠薬を飲まして練炭で窒息死させたり、入院患者の点滴に異物を混入させたりなどと、個人レベルの犯罪はあった。

しかしながら、統計的に言えば、圧倒的に、犯罪は男性が多い。また、特に、男性は多数の被害者が出る世界規模の戦争を引き起こしてきた。そのことから、第５次戦争終了後、このまま進めば第６次戦争も勃発するし、日常的な暴力沙汰は永遠に続くことから、人類自体が滅亡の恐れがあると判断した英知の人々は、末端の人間たちの意見は聞かずに、人類知能の提言を受けて、男性と女性の比率を１対１０００にするとともに、男性は人類の種の保存のためだけに生存させる、つまり飼うようにさせたのだった。

だから、今、自分としては、この病院を出て、どうにかするよりも、与えられた命を長引かせることしかできないのである。自分の精子を提供することにより、次の世代の人類に役立つのならば、本望だ。これはあきらめの境地なのか、絶望なのか、それとも明るく正しい道なのか。感情は常に揺れ動いている。

そうした中で、彼女、奈保子さんと出会った。ただ単に、精子を提供する製造機械としてではなく、自分の精子がどのような女性に提供され、その結果、どのような子どもが生まれるのかを見てみたい。そのためにも、彼女と会いたい。会って、直接、話をしたい。

だが、どうやって。この病院から抜け出すことは不可能だ。壁は５メートル以上、常に、パパドローンが側にいるし、ガードマンドローンも見回りをしている。また、部屋などには、監視カメラが稼働している。それらに気が付かれずに、病院から外に出ることは不可能だ。

それに、万が一、病院を脱出できたとしても、彼女がどこに住んでいるのか、どこにいるのかも

わからない。すぐに、警察ドローンに捕獲されてしまうだろう。そうなれば、これまでのような、安泰の生活は望めない。四十歳を過ぎた男性たちと同様に、処分されてしまうのだろう。自分の代わりとなる精子製造機は、いくらでもいるし、いくらでも生み出されているのだ。

　だけど、どうせ、いつかは処分される身ならば、せめて、束の間だけでも、外に出て、自由を味わいたい。女性と話をしてみたい。奈保子さんに触れてみたい。それは適わぬ夢、透明な未来なのか。

　チャンスだ。あの病院に行く機会が生まれた。赤メールからあたしの検査日の日程が届いた。あたしは病院で健康診断を受けることになった。その結果、卵子を含め、健康に問題がなければ、あたしは赤ちゃんを産むことになる。

　この機会しかない。あたしは、ママに無理やり頼んで、スパゲティ屋さんに行くふりをしながら、病院の中にカプセルを放り投げた。そのカプセルの中には、あたしの病院の訪問日時を記載したメモを入れた。後は、その時に、俊彦さんに、男性の病棟から女性の病棟に移動してもらうか、あたしが男性の病棟に忍び込んで、俊彦さんを探すかだ。必ず、男性の病棟と女性の病棟をつなぐドアがあるはずだ。そこで待ち合わせをするのが最適だ。

　でも、会ってどうするのだ。あたしの一つ目の心があたしの行動を制御する。

　なあ、奈保子。お前は、今まで、上手くやってきたじゃないか。これからも、何の問題もなく生きていける、生活できるというのに、何故、俊彦などという男性に会わないといけないのだ。お前も知っているだろう。男性がこれまで多くの戦争を引き起こし、多くの同胞を殺し、また、多くの他の生物たちも殺戮してきたことを。その間、女性たちは家を守り、子どもを育て、穏やかに生きてきたではないか。それなのに、破壊しか取り柄のない男性に会って何をする気だ。

　違う。二つ目のあたしの心がその考えを否定する。彼は、俊彦さんは、そんな今までの男性とは違う。１年間の手紙のやり取りで、彼のやさしさはわかった。それに、あたしの心が彼を求めているのだ。男性がこれまで行った残虐非道な行いの歴史は、人類知能による作り事で、あたしたち女性は刷り込められているだけではないのか。

　ああ。三つ目のあたしの心が言った。あたしはどうしたらいいのか。

　そうだ。確かに、奈保子さんの言うとおりだ。この病院は、男性だけでなく、女性も卵子を提供するために訪れる病院なのだ。こちらからは、男性の病棟しかわからないけれど、外から見ると、病院は男性の病棟と女性の病棟の大きく二つに分かれているそうだ。つまり、男性病棟と女性病棟の接点、つなぐ場所、通路となるドアがあるはずだ。まずは、そこを探そう。

　奈保子さんがこの男性病棟に入ってきたら、すぐに警備のドローンに見つかるだろうし、自分が女性病棟に入っても、すぐに見つかってしまうだろう。それならば、その通用口で待ち合わせをすればよいのだ。後は、自分がこの男性病棟を出て、女性病棟から、この病院を抜け出せばよいのだ。そのためにも、男性病棟から女性病棟への通用口をいかに捜すかだ。早速、この病院の見取り図を探そう。

　俊彦は、図書室に向かう。パパには勉強をしたいと申し出る。その言葉を信じてか、パパは図書室までは着いてこなかった。もちろん、図書室には司書ドローンがいるし、部屋の四方には監視カメラが備え付けられている。そうした中で、俊彦はこの病院ができた歴史を調べる。そこに、病院の見取り図を見つけることができればと期待を込めて。

　あった。やはり通用口はあった。残念ながら、病院の中で女性病棟と男性病棟との通路はあるものの、そこは、強固な監視体制が取られているようだ。そこを強行突破はできない。あきらめるしかないのか。いや、何としても奈保子さんに会いたい。この男性病棟から抜け出したい。他にないのか。病院全体の敷地を見る。そして、気づいた。庭だ。庭の植栽は男性病棟と女性病棟を取り囲んでいる。そして、庭の一部がつながっているのだ。自分がいつも散歩をして、監視カメラから逃れている憩いのあの大木の反対側が女性病棟の庭なのだ。今まで、あの大木に阻まれて、気が付かなかったのだ。いや、気が付いたとしても、女性病棟の方に侵入しようなどとは思わなかっただろう。

　だけど、今は違う。そこを抜ければ、奈保子さんと出会え、すぐに病院の外に出られる。そうだ。あの大木が互いの目標だ。間違うことはない。それを奈保子さんに伝えよう。ああ。早く、奈保子さんに会いたい。この病院から外に出たい。でも、どこへ。どこだっていい。奈保子さんと一緒ならば。

　ついに病院に来た。あたしにとっては生まれて以来なのだが、赤ちゃんの時の記憶はない。初めて来たようなものだ。あたしはスマホに届いた赤メールを開く。病院では守衛ドローンが立ち入りを確認している。守衛ドローンはそのメールを見ると入場を許可した。するとすぐに看護ドローンがやって来た。

「ママ。大丈夫かな？」

　あたしは不安なそぶりを見せる。あまりにも堂々としていると、何かを企んでいるのではないかと見抜かれるそうだったからだ。

「大丈夫よ。奈保子。みんな、やっていることだから」

　ママが優しい声で励ましてくれる。

　看護ドローンの案内で診察室に入る。目の前には医師ドローンがいた。

「ご存知のように、今日はあなたの健康診断を行うとともに、卵子を採取させてもらい、子どもを産むのに支障がないかどうかを検査させてもらいます。その結果、問題がなければ、あなたの卵子を人工的に製造された精子と受精させて、後日、受精した卵子をあなたの子宮に戻し、子どもを産んでいただきます。そうすることで、あなたのＤＮＡが、次の世代の人類に引き継がれるとともに、人類の種の保存と永続性が保たれるのです。ご理解とご協力をお願いします」

「はい」

　あたしは首を縦に大きく振った。あまりにも、簡単な、簡単すぎる説明だった。これでは、あたしが具体的に何をすればよいのかわからない。

「大丈夫よ。心配しないで」

　ママがあたしの引きつった顔を心配してか、アームで頬を撫でてくれた。でも、あたしの体が何かをされるのであれば、不安でしかない。このまま逃げ出したい気持ちになる。だけど、この病院にやって来た本当の目的は、俊彦さんと会い、この病院から脱出することだ。彼に会うまではこの病院にいなければならない。

「さあ、こちらへ」

　医師ドローンがあたしを奥のベッドに促す、

「関係者以外は、診察室から出てください」

　看護ドローンがママを外へ出て行くように促す。

「じゃあね。ママは外で待っているから。がんばってね」

　ママは情報としては入手しているものの、娘が検査を受けるのは初めてのことなので、不安はあるようだ。

「はい。がんばります」とあたしは答えたものの、何をがんばるのかはわからない。あたしはベッドに横たわった

「何も心配しなくてもいいですよ。痛みもありません。こちらの言う通りにしていればいいんです。じゃあ、初めて」

　医師ドローンの指示で、看護ドローンがあたしの目の前に来た。看護ドローンは、まずは、あたしの身長や体重、体脂肪、血圧、脈を測り、記録していく。

「じゃあ、次は、こちらの椅子に座ってください」

　医師ドローンはあたしの瞼を上げ、鼻の穴を覗き、口を大きく開けさせて、胸の心音を聴いた。

「はい、今のところは異常がないようですね。それではベッドに横たわってください」

　医師ドローンが白いシーツに覆われたベッドを指さす。あたしは靴を脱ぐと、小さな枕に全てを委ねるかのように頭を置いた。医師ドローンがアームであたしの腹部を触る。冷たい。

「膝を立ててください」

　あたしは医師の言う通りに膝を曲げた。足がM字に開く。

「あっ」と声を上げる間もなく、何かが挿入され、そして、引き抜かれた。

「はい。終わりました。あなたの卵子は無事に採取できました。この卵子と精子が受精したら、また、あなたの子宮に挿入します。それまで、連絡を待っていてください」

　医師ドローンが事務的に説明する。その両手のアームは何かを掴んでいた。それが、あたしの卵子なのか。見てみたいような、見るのが怖いような、複雑な気持ちだ。

　医師ドローンは大事そうにあたしの卵子を掴んだまま、どこかに立ち去った。

「痛みはないでしょう？」

　看護ドローンはあたしにシーツを掛けてくれながら、やさしい声を掛けてくれた。

「しばらくは、そのままベッドで休んでいてください。気分がよくなったら、帰ってもいいですよ。待合室ではあなたのママも待っていますよ」

　看護ドローンはやさしくそう言うと病室から出ていった。誰もいなくなった。あたしは一人でベッドに横たわったままだ。

　起き上がる。腹部を触る。痛みはない。今がチャンスだ。この機会を逃したら最後だ。あたしは部屋のドアを開ける。廊下には誰もいない。目的は庭だ。庭には約束通り彼がいるはずだ。病院の外から見えた大木。そこが目印だ。あたしは庭の方に向かって歩く。

「もう、動けるんですか？」

　誰かが背中から声を掛けてきた。後ろを振り向く。看護ドローンだ。先ほどの看護ドローンかどうかはわからない。

「ちょっと、トイレへ」

　あたしは少し顔を歪め、お腹を押さえる。

「トイレならまっすぐの突き当りですよ。お大事に」の言葉を残して、看護ドローンは急いでいるのか、トイレとは反対の方向に消えた。

　あたしは言われた通りの廊下を進む。庭が見えてきた。外に出る勝手口があった。立ち止まる。辺りを見回す。ドローンはいない。監視カメラも見えない。

　そっとドアのノブを回す。カギはかかっていない。ゆっくりとドアを押す。そこはちょうど庭につながっている。息を吸う。そして、ゆっくりと吐く。ようやく呼吸ができたような気がした。行くぞ。あたしは庭に出て、互いの目印の大木を目指す。監視カメラが見えた。だが、今更、後戻りはできない。映ったら、映った、のことだ。後のことは考えない。彼に会うことが先だ。

　高い。大木を見上げる。何百年もの間成長してきた木。人間の寿命なんてたかだか八十年だ。あたしが生まれる前から存在していた大木。その大木に、今後の未来を託す。高さ５メートル近く

の壁。だが、大木の成長に配慮してか、木の幹のギリギリまでしか壁は設置されていない。だけど、人が通れるほどの隙間はない。ここから脱出できるのか。疑念が湧く。それじゃあ、この計画は失敗か。顔から一瞬血の気が引く。その時、声がした。「奈保子さん」

　俊彦は大木を見上げる。自分が生まれて死ぬまでを越えた存在。だからこそ、今後の自分を見守って欲しい。大木を撫でる。表皮は冷たい。生きているようには見えない。

　だけど、地中深く広げた根は水分を吸収すると、病院の高さほどまで吸い上げ、葉の一枚一枚まで供給する。そして、葉は水分を基に、太陽に照らされると光合成を行い、エネルギーを生産する。同じ木の中で、互いに助け合うとともに、互いに自らができることを行っている。

　それに比べて、自分はどうだ。精子製造のためだけに生きている。それは人類の種の保存のために役立っているのだろうが、それは他の男性でもできる。自分が本当にやりたいこと。それは。と思った時、壁と大木の隙間から、白いブラウスと白いスカートが見えた。誰とも確認せずに、思わず声を出した。